

十二月も半ばになつて、日毎に寒さが厳しくなつていく。しかし、一寸の狂いもなく建っているあかつき荘は思ったほど寒くなかった。ストーブ一つあれば部屋の隅々まで暖かく、狭い部屋にも利点があるものだと思ふ。栄子は感心していた。そんなある夜、栄子は大きな物音で目を覚ました。二階の廊下を慌ただしく走る音と、何かを叫んでいる大声が聞こえてくる。

栄子は立ち上がったまま動くことができなかった。恐怖で足が震えている。しかし、管理人として何が起こっているのか確かめなくてはならない。ガウンを羽織つて階段を上がりかけたとき、志津が階段を下りてきた。

「部屋を暖め、お茶の用意をしていると管理人室のドアがノックされた。恐くてつい鍵をかけてしまっていたらしい。ドアを開けて志津を向かえ入れたとき、二階は元の静けさに戻っていた。」

「十六号室の内田さんとの夫婦喧嘩よ。今までも年に一、二回はあったの。しばらくなかったのは新しく来た栄子さんに遠慮していたのよ、きつと」

「あれが夫婦喧嘩なんですか。凄いですね。何か事件が起こったのかと思つて足が竦んでしまいました」

「何があつたんですか」

志津は少しも慌てていない。しかも、栄子の肩を抱くようにして連れ戻そうとする。

「驚いたでしょう。でも、他の部屋の人は慣れているから大丈夫。すぐ静かになるから栄子さんも部屋に帰つていて」

「でも……」

「あとで私が栄子さんの部屋に行くから、それまで待つていてちょうだい」

理由の分からないまま栄子は部屋に戻つた。

大きな物音はしなくなつていた。その代わり女の泣き叫ぶ声と、男の怒鳴り声がしばらく続き、やがて女のすすり泣く声だけが低く聞こえ

「熱いお茶を飲んで人心地つきながら、栄子は信じられない思いでつぶやいた。」

内田夫婦は共働きで、部屋には寝るだけに帰つてくるといふ生活をしている。共に四十代半ばのおとなしい感じの夫婦だった。

「あの二人、正式の夫婦ではないのよ。お互いに家庭を持っていながら駆け落ちをしてきたのね。まだ両方とも籍が抜けていなくて結婚できないみたい」

「そうだったのですか。少しも知りませんでした」

「誰も知らないと思うわ。私とは年が近いし、奥さんが私の店に時々飲みに来て打ち明けられたの。後悔はしていないけど、残してきた子供のこ

「とおもつらうと言っていたわ」

内田夫婦はあかつき荘に来て十年になると聞いていた。ともに家庭を捨てたという負い目を背負って暮らしてきたのだろうか。

「普段は仲良く暮らしていても、時に心の中のものもやしたもの爆発するらしいの。それがあいう形で現れるのね」

「その気持ちも分からなくはないけど、周りの人は迷惑ですよ」

「でも、次の日に二人そろって謝りにくるの。それも上等のケーキをもって、二階の全部の部屋をまわるの。毎度ご迷惑をおかけして済みませんって言いながら」

「いるってことは。栄子さんも私もストレスを発散する相手がないんですもの……」

志津の言葉が胸に響いて、栄子は改めて守を失った寂しさを噛み締めていた。

9

普段はビルの谷間で、そこだけが取り残されたようにひっそりと建っているあかつき荘である。

しかし、栄子が玄関に飾りを吊した瞬間、急に堂々とつばに見えてきた。磨き込まれた木板に飾りの金色の扇がよく映えて、華やかな中にも重々しい雰囲気漂よわせている。周りのビルがブラインドやシャッターを下ろしている

志津の言葉に内田夫婦を労わる気持ちがあふれていた。二階の他の住人も、志津と同じような気持ちで二人の喧嘩を黙認しているのかもしれない。

初めは二階の住人を見て冷たい人達だと思っていた。まったく別々の生活をしていて、同じ屋根の下で暮らしているもの同士、もつと仲良くしてもいいのではないかと。しかし、普段は一線を引いた付き合いをしていても、いざというときにはちゃんと助け合い、労わり合っている。日が経つにつれて分かってきたあかつき荘の人々の暖かさに胸が熱くなってきた。

「でも、羨ましいわよね。夫婦喧嘩をする相手がない中で、今はそこだけがスポットライトを浴びたように光り輝いている。栄子は通りに立ち、しばらくその光景に見とれていた。

年が変わって、あかつき荘は静かな正月を迎えた。

志津は大晦日から店の従業員を連れて慰安旅行に出かけたし、他の住人からも帰省や旅行で年末年始を留守にすると聞かされていた。十二月を原稿の締め切りに追われて過ぎた百合が残っているが、人の出入りもなく、外出する気配もない。

こんな静かな一日は、あかつき荘にきて初めて

3

4

だった。少な目に作ったお節料理も直哉と二人では食べ切れない。栄子は去年の家族三人で過ごした正月を思い出してしみりした気持ちになった。

随分昔のように思うが、まだ守を亡くして一年もたっていない。それなのに、朝晩仏壇の前で座って手を合わせるとき以外は、守を失った悲しみを忘れている。ここへ引越してくるまでは、あれほど悲しみに打ち沈んでいたというのに。栄子は茶箆筒の上に置いてある写真を見上げた。事故で亡くなる直前、家族三人で動物園にいったときの写真である。通りすがりの人に頼んでシャッターを押してもらったが、これが

瞬間があった。声を聞くことはできなかったが、栄子の手を握りしめて二、三度引き寄せるようにした。それは、残される栄子に送った守の励ましのサインだったのではないだろうか。

守は遠いところからずっと栄子を見守っているに違いない。自分が死んだ直後の栄子の取り乱しようにはさぞ心を痛め、安らかに眠ることもできなかったと思う。そして、今の栄子を見てもう大丈夫だと安心していることだろう。

「栄子もなかなかやるじゃないか。この調子でこれからも頑張れよ」
写真の中の守の笑顔が、励ましの言葉になって栄子の胸に響いてきた。

三人で写す最後の写真になるとは思ってもいなかった。

象の檻の前で直哉を抱いて笑っている守。守に寄り添うように立って微笑んでいる栄子。直哉も顔をくしゃくしゃにして右手でVサインを出している。

「栄子は箱入り娘で育って、そのまま僕と結婚しただろう。よく言えば純真無垢であり、言葉を返せば世間知らずでもある。それが心配なんだよな。直哉に手がかからなくなったら、どんどん外に出て社会勉強をしたほうがいいよ」

守がよく栄子に言った言葉だった。
病院で息を引き取る直前に意識が戻った

守を失った悲しみから立ち直ることができたのは、源造があかつき荘の管理人の仕事を与えてくれたからだ。あのまま前のマンションに閉じこもっていたら、栄子も直哉もどうなっていたか分からない。
栄子は源造と芙美の思いやりを今さらのようにありがたく思った。

「直哉、源造伯父さんのところへお正月の挨拶に行こう。ちゃんと、おめでとうございますって挨拶しなくちゃだめよ」

年末の慌ただしさに追われてしばらく源造の家に顔を出していない。今日はその分ゆっくりしてこようと思いつながら、栄子は外出の準備に取

りかかった。

「一月も半ばを過ぎて、その日は朝から底冷えのする一日だった。空は晴れているのに気温が上がらず、冬の陽射しは弱々しかった。」

「直哉を幼稚園へ送っていき、今にも雪が降り出しそうな空を気にして、栄子は急ぎ足で帰ってきた。その直後に板垣家から電話があり、栄子は源造の急死を知らされた。」

「徐々に健康を回復したように見えた源造を死に追いやったのは心臓発作である。隣で寝ていた芙美さえも気づかなかった、突然の静かな最期だったと言う。」

「だから旅行にも行けなかった。もう少し暖かくなったら二人でどこかへ行こうと話していたところだったのよ」

「でも、ここ一年の源造伯父さんは、いつ会っても穏やかな優しい顔をしていました。伯母さんといっしょに静かに暮らすことが伯父さんをそうさせたんだと思います」

「本当にそうだといいのだけれど」

(以上12月23日放送分)

「心臓が弱っていたなんて知らなかったの。だから昨夜も冷えるからと言われて晩酌の量を増やしたし、寝る前にお風呂に入るのも止めなかった。でも、そのことが引き金になったとしたら私の責任だわ」

「駆けつけた栄子に芙美は静かに源造の臨終のようすを語った。しかし、無理に感情を押さえていることが声の震えから伝わってくる。」

「そんなことないですよ。ご自分を責めないでください」

「どんな言葉も今の芙美を慰めることはできない。しかし、栄子は何か言わずにおれなかった。」

「仕事から手を引いてすぐ腰を痛めたでしょう。」